

“気づき”に全振りした1年目

会員 岡 佳佑

1 はじめに

私の弁護士1年目は総合的にみれば決して及第点には達していないが、今後の自分の弁護士像の輪郭を形作っていくであろう“気づき”の面では良い1年目だったと思う。

具体的にいうと2つある。まず、いわゆる「無知の知」と知的好奇心の追求が自分の思い描く優れた弁護士への近道になると気づいたこと。そして、法律以外の武器を何か一つ持つことが弁護士としてのさらなる成長に繋がっていくという点に気づいたことである。

2 「無知の知」と知的好奇心の追求

私が思い描く優れた弁護士というのは、さまざまな業界（IT、不動産、金融、保険、エンタメなどなど）の情勢に精通し、法律の適用や違法の有無を助言するといった単なるリーガルサービスをを超えて、その業界の情勢やその企業の経営にフィットしたサービスを広く提供できるような弁護士である。つまり、優れた弁護士になるためには、さまざまな業界の情勢を知る必要がある。

幸いなことに、私は、1年目でさまざまな業界のクライアントと仕事をする機会があった。その中で、受験生時代には学習しなかった法律（宅建業法、旅館業法、保険業法、消費税転嫁対策特別措置法など）や各業界の情勢（一番ニッチだったのは米国輸出管理規則におけるデミニミス・ルール）を知る度に、自分がいかに社会というものを知らないかを実感した。同時に、もっと広く知っていけば、あらゆる分野で最適なサービスを提供できるのではないかと思うに至った。

このように、「無知の知」とそこから生まれる知的好奇心の追求が、優れた弁護士への近道になると思い至ったというわけである。世界的に有名な物理学者はこう言ったそうだ。

The more I learn, the more I realize I don't know. The more I realize I don't know, the more I want to learn.

— Albert Einstein (1879-1955)

「学べば学ぶほど、自分がどれだけ無知であるか思い知らされる。自分の無知に気づけば気づくほど、より一層学びたくなる」という彼のこの言葉の意味するところに気づけたような1年目だった。

3 法律以外の武器を何か一つ

もう一つの“気づき”に関しては、コンプレックスからの解放がきっかけだったように思う。私は、司法試験と司法修習の成績がいずれも良くなかった。つまり、私にとって法律というのは、昔から、誰にも負けない武器になるとは到底思えないものだった。他方で、マーケティングなどの他分野に興味があり、それをどうにか仕事に活かせないかとも考えていた。

こんな思いを抱えながら業務に勤しんだわけだが、ある日、兄弁から「法律業務は3年～5年くらいやっっていけばある程度はできるようになる。むしろ、法律以外の武器を何か一つ持てるかどうかがこの先何十年と続く弁護士人生にとって重要になる」という言葉を頂いた。コンプレックスを感じていた自分にこの言葉は響いたし、これでいいんだと思えて気持ちが楽になった。

自分の得意な分野が他にあるならそれを伸ばせばいいし、「〇〇もできる弁護士」になればいい、と。そして、それが弁護士としてのさらなる成長にも繋がるのだと。

4 まとめ

2年目に入ってすでに数か月。時間は有限だ。今年は、1年目の“気づき”を実践しつつ、新たな“気づき”が得られるような年にしたい。